

## ついに発見した“超臨場感”の世界

HSS方式をさらに追求

平本 修

「コンサート・ホールで聴いている感触で再生音楽を楽しみたい」という夢が、ついに現実のものになった。“超臨場感の世界”である。

これまで私のHSS方式について、進展がある都度、成果を報告して来た。「コンサート・ホールがわが家にやって来た」との一文も発表した。その時点では「この程度の臨場感が再生音楽の限界だろう」と思っていた。それ以上の臨場感があるとは思えなかった。しかし、今般ふとしたはずみでさらにその上の世界があることを知った。再生音楽として、申分のない夢の領域である。

「演奏現場では音場は3次元的に存在する。したがって、再生時にも3次元的に音場を再生しなくてはならない」という単純明快な論理が正しかったことが、証明できた。

筆者はHSS方式で3D音場再生を実証した。ここではHSS方式による一連の実証手法を整理してみる。

- ①音源は2ch音源を使用する。
- ②“スーパーステレオ”プロセッサでフロント用とリア用の効果音を創成する。
- ③フロント効果音は正面とサイドの2カ所で再生する(→8ch再生システムとなる)。

- ④効果音は天井近くの高い位置から放出する。
- ⑤メイン・スピーカーはリスナーから見て60度の角度で配置する。
- ⑥効果音のレベルは1dBの精細度で調整・設定する。
- ⑦部屋の暗騒音は25dB/SPL程度に抑える(たいへん静かな状態)。
- ⑧部屋はデッドな造りとする。
- ⑨微弱音を聴きとれるように最大音量を90dB SPL以上にする。
- ⑩部屋を暗くする。

今回の新発見は⑥の“レベル設定”である。再生機器は3年前の変更時からいっさい手を加えていない。その間何をやってきたかという、効果音のレベル調整である。無限に組み合わせが存在する設定の中で、臨場感が増す都度、本誌上で報告してきた。しかし、いまにして思えば、最適解のまわりをウロウロ彷徨しながら、一喜一憂していたに過ぎなかった。

今年になって改めて微調整を始めたところ、突然目の覚めるような超臨場感の世界が出現した。いつものように手探りで調整していたときの偶然の産物である。3カ所の効果音の1つをわずか1dB変更しても最適点からはずれず、まさに最適点は

ピン・ポイントでしか存在しなかった!

このようなあてのない研究は、企業では認められないだろう。アマチュアだから何の責任を感じることもなく、ただ夢を追って、果てしない道を歩き続けることができた。これはアマチュアの特権を活用した研究成果といえよう。

2チャンネル再生でも、臨場感がたいへん優れている事例があるのは承知しているが、“超臨場感”の体験からいうと、2chの臨場感は前後への展開であって、左右、上方への展開が不十分である。このため、一部の閉鎖空間内での臨場感としか感じない。サラウンドによる超臨場感の場合は全空間を感じとることができ、演奏空間に身を置いているという感触が得られる。

5.1chは2chよりは臨場感が増すが、2次元平面内での臨場感の向上であり、超臨場感のレベルには至らない。

2ch愛好者がよく口にする言葉がある。「サラウンドは音像がぼける」である。効果音の適用を誤るとそのようなことになることを否定はしないが、だからといって、サラウンドがすべて悪いとするのは早計である。HSS方式では正面とサイドのレベル設定が超臨場感を得るのにたいへん重要な役割を果たしている。設定を誤れば音像がぼける。

今回到達した超臨場感の世界での音像は、鮮明極まりない。それゆえに“超臨場感”と呼ぶことにした。音源が実在するかのごとき印象が得られるが、これを“音の実像”または“立体音像”と称することにして

いる。「残響を付加して音が鮮明になる

はずがない」とも聞く。2chの音がいちばん正しいと信じている人からすれば、そういう考えも理解できないでもないが、筆者の立場でいえば、「2chの音はクロストーク欠陥のある不自然な音であり、実在感にかける」。“超臨場感”での音は実に自然な響きがし、きめが細かい。写真にたとえると、画素数が倍増した感じだ。聴き慣れたソースの中にこんな細やかな音が隠れていたのか、と驚くばかりである。

⑨の最大音量は、CDのダイナミック・レンジが90dBあるので、最小音を聴くためには、ピーク音量を90dB/SPL以上にすることがあるからである。

⑩の“暗くする”は、できれば真っ暗が望ましい。3D音場に限ったことではないが、視覚と聴覚は微妙な関係にあり、光を感じるとどうしても聴感が阻害される。純粹に音だけ評価するには、視覚情報は邪魔でしかない。真っ暗な中で音楽を聴くと、音場がすみずみまで見通せる感覚になる。闇の中では聴覚感度も上がり(5~10分の時間を要する)、微弱音がよく聴きとれる。超臨場感を得るには、音楽の細部が聴きとれることが重要だ。

去年はコンサートの録音依頼が8回に及んだ。これまでに録り溜めた生録の音源は50件前後にはなる。会場は収容人員30人程度のサロンから、1200人収容の大ホールに及ぶ。これらの生録音源は3D音場の確認におおいに役立っている。生録音源の再生で違和感があるようでは、正しい3D音場が再生できているとはいえないからである。

音の世界の不思議を知りたいかた、再生音楽の最高峰がどんなもの

かを知りたいかたは、試聴で確かめていただきたい。その豊かな響きと鮮明な音像に仰天されることだろう。

拙宅の最寄り駅は小田急線とJR横浜線が交差する町田駅です。連絡は下記メール・アドレス宛か、編集部にお申し出ください。

連絡先: ugg24777@nifty.com